

社説

内政外交

今の政府は内政外交の刷新を旗印として起りたるものなれども未だ何れの部面に於ても著しき成績を見ざるは我輩の遺憾とする所なり先づ内政の始末を見るに貨幣制度の改革は英断と云へば云ふものも實際に於ては我東洋貿易を困難ならしめたる外、格別の効能も見えずして識者の間には輕卒なりとの非難少からざるのみか通貨は膨脹し物價は騰貴して輸出は平均を失ふと共に商工業者は頻りに金融の逼迫を訴ふるなど經濟社會漸く異状を呈し來れるは畢竟するに財政の處置その宜しきを得ざるが爲めならん又人材登用の如き一時は多少實行して奮物を排斥したれば官海空気が自から一新の色を示したれども中途に失敗して舊に復したるは徒に官海を騒がしたるものにして遺る所のものは只事務の濫用と不安の念とのみ其他行政整理と云ひ臺灣の始末と云ひ高等法院長の處分と云ひ何れも失體の著しきものにして要するに一年の歳月を混雜の間に送りしものと云ふ可し而して今日の有様は如何と云ふに職員の操縦に汲々として毫も他を顧るの遺なきもの、如何にして自由黨の熱心を得んか如何にして進歩黨を裂かんか如何にして公同會の不平を慰せんか又如何にして國民議會を招かんかとは政府が全腦を擧げて苦心する所にして自由黨に向て二大臣の椅子、六七の知事及び五局長の地位、選舉入費の支出等を條件として提携を求めたるは正に其内情を示す者なり今や外交界は甚だ多忙にして寸時も注目を怠る可らず米布合併問題を追々運命を決す可き時節に向ひたるのみならず近頃東洋の方面を見れば危機日に切迫するもの、如し朝鮮に於ては殆ど傍若無人に侵入して其兵馬を翻練し其財政を監視して恰も之を掌中に弄するものあり而して支那の形勢も頗る變調を呈せり獨逸が意外にも膠州灣を占領して繼ながら山東に及びたるは單に一時の閉塞として見る可らず北京政府に向て確々談判もせず恰も宣教師の殺害を好機として突然此事に出でたる形跡より考ふるも又膠州灣は露國軍中のものなるに懸念之を占領したる事情より察するも必ず深き仔細あるものと認めざるを得ず果して然らば大政の責に任ずる者は専ら外交に注目して萬一の場合に處する用意肝要なるに然るに内の有様を見れば至る所不始末だらけにして其始末に因りて只對露會議案に汲々として復た他を顧みざるの餘裕なしとは如何にも堪へ難き次第と云ふ可し或は議員の操縦は目下の急務にして議會の多數を制するに非ざれば戦後の經營を全うする能はずと云はんか如何にも其通りなれども政府の仕事は單に對露會議案の一事に止まらず否否對露會議案の如きは只其一小部骨は過ぎずして若しも當局者の處置その宜しきを得ば議會は必ず政府を歓迎せんのみ其然らずして今日の膠局に陥りたるは畢竟實力の足らざるが爲めか然らずんば平生不養生の結果と云はざる可らず我輩が驚てより大に人材を擧げし能はずして内の不始末を始末す可しと報告する以外に内政の力を著はんが爲めなり今や實に戰後の經營のみならず更に戰前の經營に着手せざる可らず東洋の形勢は日に變遷して危機一髪の状わが何

時如何なる變も測る可らざる時に當り内の始末さへも覺束なき様にては誠に不安心に堪へず深く自から省みんよと我輩の敢て當局者に警告する所なり

師團對抗演習記事(四)

十一月二十日午前二時久留米にて 特派員 高見 編

藤光村二軒茶屋の大激戦

前二日の戦闘は何れも前衛と前衛若しくは枝隊と枝隊との衝突にして所謂部分戦闘に過ぎず而して兩軍が因りて以て離隙を決すべき主力の大決戦は實に二軒茶屋の大激戦とす何となれば南軍は是迄敵を誘致して大に逆襲せんと欲し北軍は此の堅岩を拔きて南軍を撃破せんとする所謂關ヶ原の戦闘なればなり

斯くて北軍は進路を三方に取り左翼隊は高良内村に本隊は國道より右翼隊は上津荒木村に向つて共に敵軍の根據地たる藤光村二軒茶屋の高地に進みたるが十一時三十分頃には左翼隊既に早くも南軍右翼の先頭に向つて攻撃を加へ其後廿分間を経て前衛漸く南軍根據地に對する大師山の森林間に現はれしかば南軍の右翼掩堡内に待ち設けたる步兵は直に射撃を始め續て其上に布かれし砲列一個大隊より野砲を發射したり大師山の北軍は忽ち之に應じて一齊射撃を行ひ徐ろに後兵の増援するを待ちたり時に正午十二時なり斯くて凡そ廿分後前衛は悉く大師山に集まり國道より行進したる本隊も漸く大師山と右側の高地より漸次現はれしかば南軍の正面高地に在りし砲列一個大隊も亦劇しく砲撃したりしかば北軍は益々其數を増し既に高地より漸次畑地向つて下らんとせり折柄北軍の右翼隊も漸く上津荒木村に現はれて高地に占陣せし南軍の左翼を衝かんとして劇しく射撃を行ひたるに南軍亦能く之を防ぎ且つ一個中隊の砲列を以て砲撃せしかば北軍少しく躊躇したり此時北軍の砲兵漸く到達せしかば先づ大師山頂の歩兵を漸次山腹に向つて降らしめ其跡を山砲陣地として初めて砲撃を行ひ續て國道の左右兩側にも亦砲列を布き正面の敵に向つて砲撃を加ふに至りて初めて全軍の大戦闘となり僅に五六百米距離の距離を以て兩個の師團相對し數萬の小銃より發射する聲は兩個師團七十餘門の野砲と共に凄まじき音響を發し山鳴り谷動き天地も震撼せん許りの一大壯觀を呈したり唯砲煙彈雨の文字を以て形容する能はざるは一は實戦にあらざる又一は無煙火藥及び補火藥を用ひしが爲めなりとぞ兩軍相對して斯る戦況を維持するも十數分北軍は乾田内に漸次進軍せんとする狀況あり且つ上津荒木に在りし右側の一隊は南軍の左翼を衝て其高地に上らんとして肉薄しつゝあり大師山の前衛も亦漸次山腹に下り各隊陣地を爲し重層射撃を行ひつゝあり此の有様を見

て南軍も之に應ぜんど重層正面の大部隊は一齊に山腹に下り乾田に向つて襲撃し續て南軍約八個大隊北軍約十個大隊の大兵は共に二三百米突の廣さを有する乾田内に襲撃して實に南北の兩軍は各乾田内の敵に向つて射撃するの聲は激戦中第一の活況なりし斯くて兩軍相接近するも五十米突一瞬間の間に兩軍入り

り亂れんとする際統監は大師山頂に在りて中止喇叭を吹奏せしめ審判官は急馳して兩軍の間に入り之を制止し茲に激戦の大段落を告げたり千時午後一時三十分なりし夫れより審判官は各隊の間を奔走して其現狀を視察し終りて休憩を命じたり

統監は大師山より降りて國道の左側一民家に入り審判官及び參謀官を集めて其意見及狀況を徵し講評の材料に供せり

午後三時山縣統監は兩軍各隊の諸將校を集め先づ兩軍の指揮官に一般方略と特別方略とを朗讀せしめ次に兩指揮官の決心を問ひ了りて講評を下せり其全文は既に電報し置きたり(二十一日の本紙に掲載せり)

兩師團兵舎營地に歸る 兩師團兵舎營地に歸る 兩師團兵舎營地に歸る

山縣統監の講評 山縣統監の講評 山縣統監の講評

大機

十九日夜久留米にて 特派員 高見 編

十一月十六日夜に於ける前哨線は八丁嶋、酒井西、木に亘る(假想騎兵は十七日午前六時已前其他は午前七時已前前哨線より進出する)を得ず

北軍第一特別方略 北軍第一特別方略 北軍第一特別方略

十一月十六日夜に於ける前哨線は八丁嶋、酒井西、木に亘る(假想騎兵は十七日午前六時已前其他は午前七時已前前哨線より進出する)を得ず

九州占略の目的を有する北軍は先づ其敵隊をして下ノ關要塞を砲撃せしむ

北軍は鹿兒嶋及長崎附近に假借の上陸を示したる後第一回に輸送せる第四及第五師團を以て十一月十四日未明より瀨岡及其附近に上陸を始め此地に在りし微弱なる敵兵を小倉方向に驅逐し十六日夕迄に其全部の上陸を終り

北軍司令官は第四師團を以て養栗及古賀方面の守備に充て第五師團を左の訓令を與へたり

一、開闢の報に依れば敵兵漸次久留米に集合するものゝ如し

二、貴官は此敵を成るべく遠く南方に驅逐し以て我後援隊の上陸をして安全ならしむるものと誓ひべし

大機

十九日夜久留米にて 特派員 高見 編

十一月十六日夜に於ける前哨線は八丁嶋、酒井西、木に亘る(假想騎兵は十七日午前六時已前其他は午前七時已前前哨線より進出する)を得ず

北軍第一特別方略 北軍第一特別方略 北軍第一特別方略

十一月十六日夜に於ける前哨線は八丁嶋、酒井西、木に亘る(假想騎兵は十七日午前六時已前其他は午前七時已前前哨線より進出する)を得ず

九州占略の目的を有する北軍は先づ其敵隊をして下ノ關要塞を砲撃せしむ

北軍は鹿兒嶋及長崎附近に假借の上陸を示したる後第一回に輸送せる第四及第五師團を以て十一月十四日未明より瀨岡及其附近に上陸を始め此地に在りし微弱なる敵兵を小倉方向に驅逐し十六日夕迄に其全部の上陸を終り

北軍司令官は第四師團を以て養栗及古賀方面の守備に充て第五師團を左の訓令を與へたり

一、開闢の報に依れば敵兵漸次久留米に集合するものゝ如し

二、貴官は此敵を成るべく遠く南方に驅逐し以て我後援隊の上陸をして安全ならしむるものと誓ひべし